
インド＝ヨーロッパ語族 比較神話学の試み：戦闘と滅び

松村一男

—Abstract

Part One: In the Indian epics, the *Mahābhārata* and the *Rāmāyana*, the heroes (the Pāndavas and Rāma) represent two aspects of heroic elements (fighting and wandering) simultaneously, whereas these two aspects are represented separately in Greek epics by Achilles and Odysseus. Nevertheless, the two Indian epics and two Greek epics show remarkable similarities, which can only be explained by a common origin. Further evidence of a common origin in the epic heritage can be provided by an episode in the *Mahābhārata* called the story of Nala (*Nalopākhyānam*) that shows structural similarities to the *Odyssey*. Common origin of the *Iliad* and the *Mahābhārata* being generally accepted, similarities with Indian epics could be also detected in the case of the *Odyssey*, especially with the *Nalopākhyānam*. Thus we can assume a common origin for the two Indian epics (and an episode in one of them) and two Greek epics. These epics (and an episode) developed further thereafter but still show traces of a common origin.

Part Two: The concept of cyclical ages seems to be shared among the Indo-Europeans. The first is the Golden Age, then gradually the condition becomes worse, and finally the worst comes. In this last stage, the world perishes first by fire and then by water. Following this, the world is renewed and another cycle from the Golden Age resumes. This concept is definitely observable in Ancient India, Scandinavia, and Ancient Iran. Some traces of this also remain among the Greeks and the Romans. Perhaps the message of the myth is that although disasters caused by fire and water are unavoidable, still they are also the beginning of a new period of the Golden Age.

The following two papers are Japanese translations of two papers in English concerning Indo-European comparative mythology. I do not claim that the ideas in them are original. They are rather my personal summaries of what I have learned and understood recently about the results of Indo-European comparative mythology established by such scholars as G. Dumézil, S. Wikander, C. Watkins, B. Lincoln, and many others.

Part One, titled “Comparative Epic Literature” was presented at the 12th Annual International Conference on Comparative Mythology “Myths of the Earth and Humankind: Ecology and the End of the World” held at Tohoku University in Sendai on June 1-4, 2018, and Part Two, titled “How the End and the Renewal were envisioned among the Indo-Europeans” was presented at the Tohoku Forum for Creativity Thematic Programs, Geologic Stabilization and Adaptations in Northeast Asia, Workshop 1 Natural Disaster and Religion/Mythology, held on June 5, 2018.

I would like to thank all the participants for their pertinent criticisms and encouraging suggestions.

— 要旨

第一部：インドの叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』の英雄たち（パンドヴァ五兄弟、ラーマ王）は英雄の二つの側面（戦士と放浪者）を同時に体現している。これに対して、ギリシアの叙事詩においては二つの側面はアキレウスとオデュッセウスという二人の英雄がそれぞれ担っている。しかしながら、インドとギリシアの叙事詩群には極めて細部に至るモチーフの一致が認められ、これは共通の叙事詩からの発展・分化の結果であると考えざるを得ない。さらにまた、『マハーバーラタ』中の一エピソードである「ナラ王物語」にも『オデュッセイア』との顕著な構造的対応が指摘されている。これまでも『マハーバーラタ』と『イーリアス』の共通起源については一般的に承認されてきているが、インド叙事詩との共通要素が『オデュッセイア』においても認められるとなれば、インドの『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』、「ナラ王物語」とギリシアの『イーリアス』、『オデュッセイア』はすべてインド＝ヨーロッパ語族が拡散する以前の時代に遡る原叙事詩型に由来すると考えるべきとなるだろう。

第二部：時代の循環サイクルの概念はインド＝ヨーロッパ語族に共有されていたらしい。第一の時代は黄金時代であり、その後は次第に悪い状態となり、最後が最も悪くなる。この最後の時代に世界はまず火災によって、ついで大水によって滅びる。しかしその後、世界は再生し、新たな時代の循環サイクルが黄金時代から始まる。こうした概念はインドとイランと北歐ゲルマンにおいて確実に認められる。またその痕跡はギリシアとローマにも認められる。おそらくこの神話のメッセージは、火災や大水による大災害は不可避であるけれども、それはまた新しい繁栄の時代の始まりでもあるというものだったのだろう。

I. 比較叙事詩

はじめに

トロイ戦争はギリシア（アカイア人）とトロイア人が戦う大戦争である。トロイ戦争のような大戦争は叙事詩の主題として、言語文化を共有するインド＝ヨーロッパ語族の他の領域においても、アイルランドの『クアルングの牛捕り』(TBL)、北歐の神々の黄昏、インドの『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』、イランの終末神話などいろいろと知られている。それらすべてに共通する、つまりインド＝ヨーロッパ語族共住期に遡る話素を探ることがデュメジル、シュミット、ワトキンス、マロリーらによって行われている。しかしこれらすべてではなく、その一部についてだけに共通して見られる話素も理論的には考え得る。これは印欧語における文法や語彙の一致・対応についても認められる（例えば *centum* と *satum* の違いや双数の有無）。これは、叙事詩の伝統は一度に成立したと考えるより、複数の段階を経て、現在残っている形になったと考える方がより現実的だという見方とも重なる。本稿ではギリシアとインドの叙事詩には、他地域の叙事詩よりもより強い結びつきが認められるという指摘を行う。

『イーリアス』 + 『オデュッセイア』、『マハーバーラタ』 + 『ラーマヤナ』

かつて私は英雄の二タイプということで戦う英雄と旅する英雄という区分を論じたことがある⁽¹⁾。ギリシアでいえば、戦う英雄としてはアキレウス、そして旅する英雄としてはオデュッセウスが典型である。もちろん、どちらか一方だけの英雄というのはいなくて、ほとんどの英雄は両方の要素を示す。十二功業を成し遂げるために世界の果てまで旅をするヘラクレスは両方の要素ともによく示している。

従って英雄を主人公とする叙事詩にも二タイプがあることになる。アキレウスを主人公とする『イーリアス』は旅よりも戦闘中心で、オデュッセウスを主人公とする『オデュッセイア』は戦闘よりも旅中心である。ヘラクレスのように両方の要素を同程度に示す英雄を主人公にした叙事詩はギリシアには残っていないが、インドでは『マハーバーラタ』が旅と戦闘の両方の共存をよく示している。

英雄とは普通の人間に成しえない偉業を達成する存在であり、そうした偉業とは大きくまとめてしまえば、一つは常人の行きえない世界に旅して無事に帰還することであり、もう一つが常人の成しえない武勲であろう。だから英雄の讃歌である叙事詩も二つの要素のいずれを強調するかで異なるタイプが生まれるのであろう。

インド＝ヨーロッパ語族は言語だけでなく文化も共有している。したがってインド＝ヨーロッパ語族起源の諸文化の叙事詩についても当然、共通の祖形があったと想定できる。ギリシアの『イーリアス』はトロイの都を巡る戦いの物語である。ギリシア軍はトロイに船団を組んで旅するのだが、それについては重要なエピソードとはされず、語られていない。これに対して『オデュッセイア』ではトロイでの戦いの後の困難な帰還が中心である。作品の最後には求婚者たちとの戦いもあるが、しかし『イーリアス』の戦闘の描写とはスケールにおいても分量においても比較にならない。

『イーリアス』の古注 (i.5) には、人々が増えすぎたため大地が呻吟しているのを見たゼウスが、大戦争によって人間に殺し合いをさせることを考えつき、そのためトロイ戦争を引き起こし、「ゼウスの意図 (ディオス・ブーレー)」が成就したとある (*dios d'eteleieto būlē*. Evelyn-White 1914: 496)。また、エウリピデスの悲劇『ヘレネ』にも同じ表現が見られる (36-41 行、中村善也訳)。

ヘレネ：さらにゼウス大神の別のはかりごと [*dios bouleumata*] が加わりました。母なる大地から、おびただしい人間の群れを減らしたい、それに、ギリシア第一の勇士アキレウスの名を輝かしたい、そんなおつもりから、ギリシアの国と哀れなトロイアに、戦争をお送りになったのです。

これに対して、インドの『マハーバーラタ』では、大地がアスラたちの乱暴に苦しみ、ブラフマに訴える。これを受けたブラフマは主要なデーヴァを呼び集め、「大地の重荷を軽

滅するため」に地上で人間に生まれ、アスラを退治するように依頼する。こうして神々はパンドヴァ五兄弟として生まれ、アスラの生まれ変わりである従兄弟のカウラヴァ百王子と、クルクシェートラの平原において大戦争を行うのである (Book1, Chap.58.25-55 または Book1, Sec.64. 英訳は Buitenen 1973: 137-38; Ganguli 1970: 131-32)。

『イーリアス』と『マハーバーラタ』において、大戦争が始まる理由が一致している点は、すでに多くの学者によって指摘されてきている (Dumézil 1968: 35; Jong 1985; West 1997: 480; 沖田 2008: 120-126. なお、Kilmer 1972; Schwarzbaum 1957 も参照)。

他方、誘拐された女性を取り戻すための戦いという点では、『イーリアス』と『ラーマヤナ』が共通している。トロイ戦争の原因はトロイアの王子パリスによるヘレネの誘拐である。そのため、夫メネラオスをはじめとするギリシアの英雄たちは、ヘレネを取り戻すためにトロイと戦う。他方『ラーマヤナ』では、悪鬼ラーヴァナによって王妃シーターが誘拐される。そのため夫のラーマと彼に加勢するハヌマーン率いる猿軍団は彼女を取り戻すために戦う。

こうしてみると、ギリシアの『イーリアス』においては、誘拐された妻を取り戻すため夫が仲間とともに大戦争を戦い、結果として「大地の重荷を軽減する」という主神の意図が成就するという構図になっているのに対して、インドの場合には「大地の重荷を軽減する」という主神の意図の成就是『マハーバーラタ』において語られ、誘拐された妻を夫が取り戻すという構図は『ラーマヤナ』において語られるという具合に別々になっている。しかし、二つの要素が一作品にまとまっているか、あるいは別々の二作品になっているかという違いはあるにせよ、二つの要素がギリシアとインドに共通して認められることは重要である。なぜなら、上記の他のインド＝ヨーロッパ語族の叙事詩にはこの二つの話素のどちらも認められないからだ⁽²⁾。

四つの叙事詩におけるモチーフの組み合わせは次のようにまとめられるだろう。

- ・『イーリアス』：重さに苦しむ大地のため、最高神が大戦争によって重みを軽減しようとする。妻の誘拐。主人公の英雄による宿敵の殺害 (アキレウス／ヘクトール)
- ・『オデュッセイア』：海を越えての航海。主人公の英雄による宿敵の殺害 (オデュッセウス／求婚者たち)
- ・『マハーバーラタ』：重さに苦しむ大地のため、最高神が大戦争によって重みを軽減しようとする。主人公の英雄による宿敵の殺害 (パンドヴァ五兄弟／カウラヴァ百王子)
- ・『ラーマヤナ』：妻の誘拐。海を越えての航海。大戦争。主人公の英雄による宿敵の殺害 (ラーマ／ラーヴァナ)

原インド＝ヨーロッパ語族の英雄叙事詩のひとつには、次のような筋書きのものがあったが、これはインドとギリシアにのみ、複数の叙事詩に分離して姿を変えながらも残存した。「妻を誘拐された英雄が妻を取り返すために仲間とともに海を越えて敵地に赴く。このため大戦争となり、主人公の英雄 (たち) は宿敵を殺害する。戦いの結果、両軍の多くの者が亡くなる。この大戦争は最高神が、重さで苦しむ大地のために人間を減らそうとして

引き起こしたもので、最高神の意図は成就する」。

ヘレネの誕生とアキレウスの誕生

インドの場合、ブラフマは戦争を起こすために神々に人間に生まれ変わるように要請し、その通りに神々はバーンダヴァ五兄弟と敵方のカルナとして生まれている。これに対して、ギリシアには神が人間として生まれてくるという化身（アヴァター）の観念はない。しかし英雄というカテゴリーがある。ゼウスが大戦争を引き起こそうという意志を実現するには、神々自身が人間に生まれ変わらなくても、神々と人間の間には英雄という子供を作るという形式が考えられる。

- ・トロイ戦争の原因となる美女ヘレネは、ゼウスが白鳥の姿となってレダと交わって生まれた娘である。
- ・ヘレネをトロイに誘拐し、ギリシア軍をトロイに招くことになったのは、トロイの王子パリスが三人の女神のうち誰が最も美しく、黄金のリングを手にする資格があるかという審判を任せ、「最も美しい女性」を贈物に約束したアフロディテを勝者に選んだためである。
- ・審判と女神たちの争いの元となったのは、争いの女神エリスが黄金のリングを神々が出席していた結婚式の席に投げ込んだからである。その結婚式とは、女神テティスと人間のペーレウスとのものである。二人の間に生まれたのが英雄アキレウスである。
- ・なぜ女神テティスが人間のペーレウスと結婚したかといえば、彼女の間にも生まれる子は父より偉大になるという予言を掬の女神テミスが行ったので、ゼウスはテティスと交われず、かといって他の神に渡すのも望まなかったため、人間の妻にしたのである。

『イーリアス』は第一行目に、「怒りを歌え、女神よ、ペーレウスの子アキレウスの」(Mēnin aeide theā, Pēlēiadeō Achilēos) とある通り、ホメロス自身が英雄アキレウスの物語であると冒頭において規定している。トロイの滅亡はオデュッセウスの発案になる木馬の計が原因だというのが一般的な理解だろうが、しかしそれはその前にアキレウスが再度戦いの場に登場してトロイ側の総大将のヘクトールを討ち取ったから、可能となったのである。トロイ戦争がゼウスの意志によるものとするなら、原因となる美女ヘレネは彼の娘だし、戦争の中心となるのは彼が意図的に産ませたアキレウスなのである。

こうした構図をホメロスが意識していたのかは分からない。しかしそうした構図は有り得ただろうと予想する。理由は、1) 人口が増えすぎたために神(々)が意図的に死によって人口を減らすという神話は広く認められること、2) インドにも神々の意図に沿って大戦争が起こって多くの英雄が亡くなる叙事詩があること、である。叙事詩の伝統は宮廷詩人や吟遊詩人によって継承されたのではないか。換言すれば、ギリシアでもインドでも全くの無から叙事詩が成立したのではなく、両者には共通する神話モチーフがあったと想定

されるのである (Mayer 1996)。

ヘレネとディオスクーロイ、サラニューとアシュヴィン

ヘレネはディオスクーロイとともにゼウスとレダの交わりから生まれている。また彼女については、パリスによってトロイに誘拐されたのは似姿であって、本当のヘレネはトロイ戦争の間、エジプトにいたという伝承がある (エウリピデス『ヘレネ』31-36行、中村善也訳)。

ヘレネ：ヘラさまは、女神たちに勝てなかったことを恨みに思い、パリスとわたくしとの結婚を空に帰させ、プリアモス王の子息〔パリス〕に私を渡そうとはなさいませんでした。そしてその代わりに、私に似せて空気からつくられた、生きた像を与えられたのです。首尾よく私を手に入れた—そう思っているにちがいないパリスなのですが、それは空しいそらおもいにすぎません、事実はまるでちがっているのです。

これに対して、『リグ・ヴェーダ』10.17.1-2 (Jamison and Brereton trans. 2014: 1398) には次のようにある。

1「トヴァシュトリが娘〔サラニュー〕のために結婚式を行う」と聞き、世界のすべての者たちが集まった。しかし、ヤマの母、偉大なヴィヴァスヴァットの妻〔サラニュー〕は結婚の行列の中から姿を消した。2神々が人間のもとから彼女を隠したのだ。そして彼女の似姿を作って、それをヴィヴァスヴァットに与えた。そして彼女は母胎にアシュヴィンを持っていた。そして双子を置き去りにした、サラニュー。

アシュヴィンの母と双子の母はそれぞれ、サラニューなのかそれとも彼女の似姿なのかは、はっきりと述べられていない。しかし、ギリシア神話において双子神ディオスクーロイの姉妹であるヘレネに似姿の神話があり、他方インドでは、ディオスクーロイと同一起源と思われる双子神アシュヴィンの母(?)のサラニューについても似姿の神話が伝えられている (cf. O'Flaherty 1980: 174-5)。これは偶然ではなく、共通の神話伝承に遡るものであろう⁽³⁾。

『オデュッセイア』と『ナラ王物語』

こうしたインド=ヨーロッパ語族期に遡る神話モチーフの可能性を支持するもう一つの例にギリシアの『オデュッセイア』とインドの『マハーバーラタ』の一部をなす『ナラ王物語』*Nalopākhyānam* との類似がある (テキストは *Mahābhārata* 3. 50-78; Buitenen trans., *The Mahābhārata*, vol. II, Chicago, 1975, pp.322-64 および 笠原 1989。比較分析は Gresseth 1979 に拠る)。

まず『ナラ王物語』の概要から説明する。主人公はニシャダ (Nishadha) 国の王子ナラ

(Nala) である。彼は王女ダマヤンティー (Damayanti) の主宰した婿選び婚 (svayamvara) において夫として選ばれる。しかし二人は賭けの神カリの怒りを受け、子供も授かっていたナラは兄弟のプシュカラ (Puškara) との賭けにすべてを賭けて、財産も王国も失ってしまい、追放されて森を彷徨う。ナラ王は森でダマヤンティーが寝ている間に彼女を捨ててしまう。ダマヤンティーは苦労の末に父王ビーマ (Bhīma) の国に帰還する。彼女はナラの行方を探す。ナラはリトゥパルナ王の宮廷で御者ヴァーフカに変装して暮らしている。ダマヤンティーはナラを見つける策略として、ナラを見つけることを諦めたから、二度目の婿選び婚を行うという虚偽の宣言を行う。リトゥパルナ王はこれを聞くと、自分も参加しようとする。御者ヴァーフカ (実はナラ) が操る戦車は驚異的な速さでヴィダルバ国に到着する。こうしてナラとダマヤンティーは再会する。ナラはカリの魔力から自由になり、賭けに勝つ秘法も学び、故国に戻って、賭けに勝利して自らの王国を取り戻す。

1. 主人公は王女と結婚する：

- ・オデュッセウスとペネロペイアの結婚は『オデュッセイア』には語られていない。
- ・ナラとダマヤンティーは結婚する (3.50-54、鑑訳1-5章)。

2. 神の怒りを招く：

- ・ポセイドンの怒り (『オデュッセイア』 1.19-21; 9.528-36)。
- ・賭けの神カリは夫婦の幸せを妬み、破滅させようとする (3.55.6, 12-13、鑑訳6-7章)。

3. 主人公と妻は子どもが生まれた後、別れ別れになる：

- ・オデュッセウスは、テレマコスが一歳の頃、戦場に出ていく (『オデュッセイア』 1.215-16; 4.144)。
- ・ナラとダマヤンティーの間には男女二人の子がいるが、ナラが失踪した当時彼らは十二歳くらいである (『ナラ王物語』 3.65.2、鑑訳6-8章)。

4. 行方不明になった主人公の捜索が行われる：

- ・「テレマコスの冒険」(『オデュッセイア』 1.281-92; 15書; 16.188)。
- ・ダマヤンティーは父王に頼んで、バラモンたちに夫を探させる (『ナラ王物語』 3.67.6、鑑訳17章)。

5. 親切な王の御蔭で主人公は帰還する：

- ・オデュッセウスはパイアケス人の元にたどり着く。王アルキノオスは歓待の後、オデュッセウスを故郷に向けて送り出す (『オデュッセイア』 8書、13書)。
- ・リトゥパルナ王はダマヤンティーに求婚するために御者のヴァーフカ (実はナラ) に命じてダマヤンティーの元へと戦車を駆らせる (『ナラ王物語』 3.69.1、鑑訳18-19章)。

6. 主人公は魔術的な力によって短時間で遠方から帰還する：

- ・オデュッセウスはパイアケス人の魔法の船で眠っている間に故郷に帰還する (『オデュッセイア』 13.78-95)。
- ・ナラは魔法の戦車を駆ってヴィダルバ国に一日で到着する (『ナラ王物語』 3.71.24c、鑑

訳 19 章)。

7. 主人公は変装して帰還する：

- ・オデュッセウスはイタカ島に到着後、女神アテナによって乞食の姿に変えられる (『オデュッセイア』 13.429-38)。
- ・ナラは蛇王カルコータカによって醜い姿に変えられる (『ナラ王物語』 3.63.11cd、鎧訳 14 章)。

8. 主人公の飼っている動物が最初に彼の事を認識する：

- ・オデュッセウスの老犬アルゴス (『オデュッセイア』 17.290-327)。
- ・ナラ王の愛馬たちは主人の駆る戦車の音で主人の帰還を知り、喜ぶ (『ナラ王物語』 3.71.3、鎧訳 21 章)。

9. 妻は変装した主人公が夫ではないかと疑う：

- ・オデュッセウスはペネロペイアと会う (『オデュッセイア』 19 書)。
- ・ナラとダマヤンティーは、ナラが彼女を森で見捨てて以来初めて向かい合う (『ナラ王物語』 3.74.7-75.21、鎧訳 24 章)。

10. 妻は夫と二度話す。一度目は変装、二度目は本当の姿：

- ・夫婦の二度の対話 (『オデュッセイア』 19.103-360; 509-99; 23.166-230)。
- ・夫婦の二度の対話 (『ナラ王物語』 3.72.6-29; 3.72.24a; 3.74.7-3.75.21、鎧訳 22 章、24 章)。

11. 確認のための手がかりや品々：

- ・『オデュッセイア』 四つの徴あるいは試験: 1. 太ももの傷、2. 大弓、3. 本来の姿、4. 寝台の試み (『オデュッセイア』 1. 19.386-96 (cf. 23.74-77); 2. 21.393-423; 3. 22.1-4; 4. 23.177-209)。
- ・『ナラ王物語』 六つの徴あるいは試験: 1. 戦車の音、2. ナラは泣く、3. ナラが示す卓越した振る舞いや仕草、4. ダマヤンティーがヴァーフカの調理した焼肉を試食する、5. ナラが子供たちと会って正体を明かす、6. ナラが本来の姿を取り戻す (『ナラ王物語』 3.71-75、鎧訳 21-24 章)。

12. 再会した夫婦は互いの話をする：

- ・『オデュッセイア』 23.300-343
- ・『ナラ王物語』 3.75.24、鎧訳 24 章

13. 妻との再会の翌日、主人公は父あるいは義理の父を訪問する：

- ・オデュッセウスは父親ラエルテスを訪問する (『オデュッセイア』 24.205-534)。
- ・ナラとダマヤンティーはダマヤンティーの父ビーマ王を訪問する (『ナラ王物語』 3.75.23bd; 76.1-4、鎧訳 25 章)。

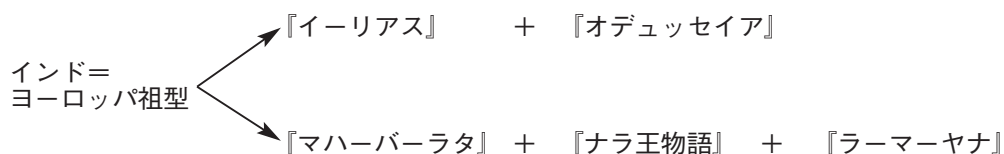
14. 結末は途中で置かれていて、後は後日談的となる：

- ・『オデュッセイア』 の結末は 23.232 が相応しい (「妃の言葉にオデュッセウスは、いよいよ慟哭の想いが胸に迫って来て、愛する貞淑な妻を抱いて泣いた」、松平千秋訳)。
- ・『ナラ王物語』 の結末は 3.75.21 が相応しい (「虎のように雄々しい武士ナラ王も痛恨の念

にあふれ、肢体泥埃にまみれた、微笑み麗しいダマヤンティー妃をかき抱いて、大層長い間佇んでおりました」(鑑訳 24 章)。

これだけの一致は同一起源のためと考えるのが妥当であろう。

ギリシアとインドの叙事詩群の同一起源が認められ、また『オデュッセイア』と『ナラ王物語』の同一起源が認められるなら、上記の四叙事詩の関係図はより一層複雑なものとなるだろう。すなわち、四叙事詩のもととなった原叙事詩は、それを保持していた集団が原郷地から移動して、ギリシア方面とインド方面に分かれる以前にすでに、原叙事詩の内部において、『オデュッセイア』と『ナラ王物語』になる部分についてはかなりまとまった筋書きが出来ていた、ということになるからだ。その場合、『オデュッセイア』では海を越えた地への往還だが、『ナラ王物語』では陸地の別の王国への往還であり、海を越えての往還となるのは一方がギリシアに、そしてもう一方がインドに到達した後のことで、『オデュッセイア』と『ラーマーヤナ』において海を越えての往還という形になるのは、後代の独立した結果と考えられることになる。そして『オデュッセイア』が独立した叙事詩となったのと異なり、『ナラ王物語』は独立した叙事詩とはならず、より大きな叙事詩である『マハーバーラタ』の内部にエピソードとして残ることになったのであろう。



終わりに

先述のギリシアとインドの叙事詩の比較検討からしても、インド=ヨーロッパ語族分離拡散期以前からの共通のモチーフ構造の存在の可能性はかなり高いだろう。だとすれば、『イーリアス』だけでなく『オデュッセイア』の場合においても、インドと共通のモチーフ構造を用いて作品化されたと考えられよう。

II. インド=ヨーロッパ語族の終末と再生観

古代インド

古代インドでは世界は四つの時代が循環するという考えがあった。まとまったものとしては叙事詩『マハーバーラタ』第三巻がある(186章18-23、上村2002:041)。

- 1.クリタ・ユガ:4000年
- 2.トレーター・ユガ:3000年
- 3.ドゥヴァーパラ・ユガ:2000年

4.カリ・ユガ：1000年

クリタ・ユガは完全な時代（黄金時代）であり、次のユガになるに従い段々と時代は悪くなる。そして最後のカリ・ユガは最悪の時代であり、世界は終わりを迎える。しかしその後、再びクリタ・ユガが訪れる（同188章10-87、上村2002：055-060）。

188章73-76「ユガの終末には、一切万物は無に帰すであろう。すべての方角は燃え上がり、星宿は動揺し、星々は逆行し、風は荒れ狂い、多くの流星があり、大恐怖を示すであろう。太陽は他の六つの太陽とともに熱するであろう。いたるところで大音響が起こり、諸方は燃え上がる。（中略）ユガの終末になると、千眼者（インドラ）は時ならぬ雨を降らせ」

同85-87「ユガの終末の大混乱が生じた後、バラモンをはじめとする世界が次第に生ずるであろう。それから時が過ぎて、自ずと運命は好転し、再び世界の繁栄が訪れる。月、太陽、鬼宿（ティシュヤ）、木星が同じ宮で合する時、クリタ・ユガ（黄金時代）が訪れるであろう」

古代イランと北歐

古代インド人と古代イラン人が元来は一つのインド・イラン語派をなし、言語、文化において極めて共通性が高かったことはよく知られている。したがって上記の四つの時代（ユガ）の循環の観念は古代イランにも存在したと想定できる。しかし、インドに比べてイランでは文献の保存状態が悪く、資料となりうるのはイスラム化した9世紀にまとめられた中期ペルシア語の「原初創造」という意味の『ブンダヒシュン』となる。これには邦訳があるが（野田2009、2010、2011）、その訳者解説（野田2009：149）にも述べられているように、短いインド版と長いイラン版があり、イラン版にも三つの写本があって、古代イラン人の時代交代観念を確認することは容易でなかった。

他方、北歐神話についてはまた別の問題があった。北歐神話において世界の滅亡と再生は韻文の「巫女の予言」と散文の「ギェルヴィたぶらかし」において伝えられており、インド＝ヨーロッパ語族の時代交代神話に属するのではないか、という説がある一方、これらの文献が記録されたのが既にキリスト教化されていた13世紀のアイスランドであったことから、この世界の終末と再生の描写はキリスト教の終末の描写に影響されたものであるとする説が後を絶たない⁽¹⁾。

こうした疑問点を解消するためにスウェーデンのストロームは、より単純な構成の「巫女の予言」を出発点として、そこで述べられている世界の始まりから悪の力による災害、そして最後の神々と悪との戦い、世界の滅亡、その後の世界の復活という一連の経緯の配置を、度重なる編集により本来の配置が失われ、脈絡が辿りづらくなっている「ブンダヒシュン」と比較し、物語の展開の流れに則して、両者に共通するテーマが見つかることを示した。この作業によって、古代イラン神話も北歐神話も古代インドや古代ギリシアと同

様に、世界完成時の完全な状態が悪の力の発生によって次第に劣化し、最後には火と水による災害によって滅び、しかしその後、再び完全な姿で出現するという神話が存在した可能性が高いことが説得的な形で示されたのである (Ström 1967: 183-194)。

「巫女の予言」と「ブンダヒシュン」の構造的比較による同一起源証明の試み

ストロームは「巫女の予言」を21の構成要素に分け、それぞれに対応する要素が「ブンダヒシュン」にも認められると指摘する。「ブンダヒシュン」は「巫女の予言」に比べはるかに膨大で、多様な要素が混じっているため、世界の始まりから滅亡、再生という筋書きは見えにくい。しかし「巫女の予言」を手掛かりとすることで、「ブンダヒシュン」においてもこの21の要素がこの順番で配置されていることが確認できる。構造の同一を指摘することによって起源の同一が証明されるのである。なお、「ブンダヒシュン」では一部の章が順番どおりになっていないため、疑念を持たれるかも知れないが、これは長短二種類の写本があり、一方の写本に見られない要素が他方の写本にある場合に章数が違うということである。この異動の問題については野田訳解説を見られたい。

1. 原初の深淵

- ・巫女の予言3:「奈落の口があるばかりで」
- ・ブンダヒシュン第1章5:「彼ら [オフルマズドとアフレマン。換言すれば、オフルマズドのいる無限光明とアフレマンのいる無限の暗闇] の間には空虚があった」

2. 太陽、月、星

- ・巫女の予言5:「太陽は、自分の館がいくどこにあるかを知らず、星々は、その住居がいくどこにあるかを知らず、月は、己の力がどのようなものか知らなかった」
- ・ブンダヒシュン第2章1:「オフルマズドは光明を創造して天と地の間に配置した。すなわち、恒星と惑星、ついで月、そして太陽である」

3. 悪の攻撃がはじまるまで

- ・巫女の予言8:「(神々は楽しく過ごしていた) ヨーツンヘイムから凶暴な巨人の娘らが三人やってくるまでは」
- ・ブンダヒシュン第4章 攻撃が被造物に襲いかかることについて:1「ガンナーグ・メーノーグは……3000年間気絶状態にあった」、4「3000年の終わりに邪悪なジェフ(魔女)が現われて言った「起きてください。われらの父よ!」、5「ガンナーグ・メーノーグは安堵して、卒倒状態から飛び起き、ジェフの頭にキスした」

4. 不完全な最初の人間

- ・巫女の予言17「岸辺で(三人の……神々は)無力で自らの運命を知らぬアスクとエムブラを見つけた」
- ・ブンダヒシュン第14章6:「一本の茎と15枚の葉をもつ大黃の姿でミフリーとミフリーヤーニーが大地から生えてきた。その様は手を耳に当て、互いに結びついて同じ丈

同じ形であった」、7：「二人の間には光輪があった。彼らは同じ丈であったが、どれが男でどれが女で、どちらがオフルマズドの創った光輪とともにいるのか明らかでなかった」

5. 人間は魂と活動を受け取る

- ・巫女の予言 18：「オーディンは息を与え、ヘーニルは心を与え、ローズルは生命の暖かさと良い姿を与えた」
- ・ブンダヒシュン第 14 章 10：「それから両方の植物の姿は人間の姿に変わった。その光輪は靈的にその中に入った、すなわち魂である」

6. 世界樹

- ・巫女の予言 19：「ユグドラシルという名のトネリコの大樹が立っているのを、わたしは知っている。その高い樹は白い霧に濡れている」
- ・ブンダヒシュン第 16 章 5：「アルドウィースールの泉に傷病を癒し、汚れのない白ホームの木が生えている」

7. 水源が樹木をつねに緑に保つ

- ・巫女の予言 19（続）：「ウルズの泉のほとりにいつも青々と緑の樹が、高く聳えている」
- ・ブンダヒシュン第 16 章 4：「すべての種から多種の木がフラーフカルド海に生えており」

8. 「不死なる者」が殺される

- ・巫女の予言 32：「ほっそり見えるこの木〔寄生木〕が危険きわまるわざわいの矢にかわり、ヘズがそれを〔バルドルに対して〕射た」
- ・ブンダヒシュン第 29 章 8：「サムンについては、彼は不死だったと言われている。彼はマズダー崇拝者のデーンを軽んじていたので、寝ている間に、ノーヒーンという名のトゥルク人に、ペーシャーンスーの平原で矢で撃たれた」

9. 邪悪な者が縛られる

- ・巫女の予言 35：「温泉の森に、わざわいを次々とたくらむロキに似た者が縛られ横になっているのを、私は見た」
- ・ブンダヒシュン第 29 章 9：「ベーラワスプとも言われるダハーグについてはこう言われている。フレードーンが彼を捕まえたとき、殺すことができなかった。そこでドゥンバーワンド山に縛りつけた」

10. 悪者たちが死の流れを歩く

- ・巫女の予言 39：「重い流れの川を、偽証人、人殺し、人妻を誘惑した者が、徒渡るのを、わたしは見た」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 18：「火とエールマーン神は山の中の金属を溶かし大地の上を川のように流す」

11. 犬（たち）と冥界の洞窟

- ・巫女の予言 44：「〔ヘル¹の犬〕 ガルムがグニパヘリル〔ヘル¹の入口〕の前で、はげしく吠えた」
- ・ブンダヒシュン第 30 章 3：「霊界の犬がその橋〔チンワド橋〕にいる。その橋の下には地獄がある」

12. 共同体関係の崩壊

- ・巫女の予言 45：「兄弟同士が戦い合い、殺し合うであろう。親戚同士が不義を犯すであろう。この世は血も涙もないものとなり」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 14：「息子は父のそばから、兄弟は兄弟から、友は友から切り離される」

13. 狼の時

- ・巫女の予言 45（続）：「風の時代、狼の時代がつづいて、やがてこの世は没落するであろう」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 17：「大地は、羊が狼に毛をむしられたときのように痛がる」

14. 邪悪な者が解き放たれる

- ・巫女の予言 47：「巨人たちは自由の身になる」、49：「鎖は引きちぎられ、狼〔フェンリル〕は走り出す」
- ・ブンダヒシュン第 29 章 8：「アズ・ダハーグが解放されたとき」

15. 善の力と悪の力がそれぞれ一騎打ちをする

- ・巫女の予言 53：「オーディンが狼に戦いをいどみ、ベリの輝く殺し手〔フレイ〕がスルトを敵にまわすとき」、56：「オーディンの息子〔トール〕は……大蛇を向こうにまわして立ち向かわんとする」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 27：「オフルマズドはガンナーグ・メーノグを、ワフマンはアコーマンを、アルドワシュトはインダルを……」

16. 世界の崩壊

- ・巫女の予言 57：「太陽は暗く、大地は海に沈み、きらめく星は天から落ちる」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 17：「天空の竜のゴージフルが月の端（？）から大地に落ちた」

17. 火が世界を焼き尽くす

- ・巫女の予言 57（続）：「煙と火は猛威をふるい、火炎は天をなめる」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 18：「火とエールマーン神は山の中の金属を溶かし大地の上を川のように流す」

18. 黄金時代の復活

- ・巫女の予言 61：「その昔、神々の用いた黄金のすばらしい将棋が、野原の草かげから見つかるであろう」、62：「種も播かぬのに、穀物は育つであろう。すべての禍は福に転ずるであろう」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 22：「オフルマズドはその時被造物の完成者である。すなわ

ち、死者を復活させている間、何もする必要がない」

19. 兄弟縁者の再会

- ・巫女の予言 62：「ヘズとバルドルは、フロプトの勝利の地に仲よく住む」、63：「オーディンの兄弟の子らは、広々とした風の住居（ヴィンド・ヘイム）に住む」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 20：「大いなる愛情をもってすべての人—父も息子も兄弟もすべての友人も—はつどう」

20. 新たな供犠

- ・巫女の予言 63：「ヘーニルは犠牲の枝をとり」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 29：「オフルマズドはゲーティーング界に来る。彼自身ゾートである。スローシュ・アフ라우はラースピーグであり、手に腰帯をもつ」

21. 強き者の到来

- ・巫女の予言 65：「そのとき、すべてのものを統べる強き者が、天から裁きの庭におりてくる」
- ・ブンダヒシュン第 34 章 29：「オフルマズドはゲーティーング界に来る。彼自身ゾートである。スローシュ・アフ라우はラースピーグであり、手に腰帯をもつ」

「巫女の予言」は巫女の幻視と言う形式で世界の創造から没落、終末、再生を語っている。1. 世界の創造（3—8 節）、2. 人間の創造（17—19 節）、3. 世界の滅亡（32—57 節）、4. 世界の再生（62—65 節）。

「ブンダヒシュン」もまた四つの部分で構成されている。1. 天界の創造 *mēnōk*（1 章—4 章）、2. 物質存在 *gētīg*（14 章—18 章）、3. 悪の来襲 *gumečišn*（29 章—30 章）、4. 世界の浄化 *frašo-kərəti*（30 章）である。1 はまだ形をなしていない観念的世界メーノグである。2 のゲーティーング世界では物質的な世界が出現する。しかしこの時期は悪の力は無力化されている。3 になって悪の力が善の力に入り込み、ついには世界の滅亡に至る。しかし最後の 4 では悪の力が滅ぼされ、完全な世界が出現する。両者には細部では一致しない個所もあるが、全体としてみれば類似すなわち同一起源は疑いえないと思われる。

古代ギリシアと古代ローマ

ヘシオドス『仕事と日』には「五時代の説話」がある。はじめは黄金の種族の時代、次に銀の種族の時代、次に青銅の種族の時代、次に英雄の種族の時代、そして最後に鉄の種族の時代である。ヘシオドスの生きる鉄の種族の時代は「昼も夜も労役と苦悩に苛まれ、その止む時はない」（176—177 行）。ここでは世界が次第に悪くなっていくという観念は認められるが、世界の終末と再生は述べられていない（ヴェルナン 2012）。

英雄の種族の時代が異質で、後代の追加であることは、ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』が「四つの時代」として黄金の種族の時代、銀の種族の時代、銅の種族の時代、そして鉄の種族の時代のみを挙げている（I. 89-131）ことから支持される。

おわりに

こうして古代インド、古代イラン、北欧、古代ギリシア、古代ローマの神話伝承の比較により、インド＝ヨーロッパ語族が分裂以前から大災害による世界の滅亡とその後の復活という神話観念を共有していたと考えることができるだろう⁽²⁾。

— I の注

(1) Matsumura 2014.

(2) 関連して三つの事案を記しておく。

①こうした叙事詩のテーマはなぜ構想されたのだろうか。それは吟遊詩人によって編まれた戦士階級への娯楽作品であったのだろうか。死者を弔う儀礼の一部といった娯楽以上の意義を求めることは可能なのだろうか。この点について私はまだ満足する答えを見つけていない。

②本稿では、後のギリシアとインドの叙事詩群には元となった叙事詩（どの程度の完成度であったか、あるいは単独作品なのかは問わずとも）があり、それが後に分化・展開して、現在のような複数の作品群となったという説を採った。しかし、どちらの地域で出来た作品がもう一方に伝わったとする考え方も当然ある。そしてその場合には、ギリシアとインドのどちらが先だったのか、という見解も示される。スペイン、マラガ大学古代史教授のアルフォンソ (Alfonso 2014) は、もっぱら『マハーバーラタ』と『イーリアス』の比較によって、『マハーバーラタ』はトロイア戦争から刺激を受けて成立したもので、アレクサンドロスのインド到来時に『イーリアス』が伝わったのだとしている。しかしギリシアとインドの叙事詩の類似はこの二作品に限定されないことはこれまで述べてきた通りであり、私としてはアルフォンソの説は認めがたい。

③二つの異なる殺害法（大戦争と洪水）ではあるが、神（々）によって人類の大部分が滅ぼされるという神話が存在することは興味深い (Schwarzbaum 1957; Kilmer 1972; Jong 1985)。大戦争はインド＝ヨーロッパ語族に見られ、洪水はユーラシア西部型についてはメソポタミア起源である。最古のシュメール人は起源不明だが、その後のアッカド人はその言語からはセム語族に分類される。そのアッカドの神話が同じくセム語族に分類されるヘブライ人に伝わり、他方、セム語族の枠を超えてインド＝ヨーロッパ語族のギリシア人にも伝わった。この結果、ギリシアにはゼウスの意志による人類壊滅の神話が戦争型と洪水型の二つとも記録されている。なおウェストは『イーリアス』と『マハーバーラタ』はともに人間の数が増えたため神々が人間を滅ぼそうとするメソポタミア神話とくに『アトラ・ハースス』のモチーフに影響されて成立したと述べているが (West 1997: 482)、メソポタミアの場合のような洪水による殺戮ではないので、影響は認めがたいと思う。

(3) ヘレネとその双子の兄弟ディオスクーロイおよびサラニューとその双子の兄弟アシュヴィンについては、インド＝ヨーロッパ語族比較神話学においてより大きな問題がある。今後の課題としたい。Clader 1976; Doniger 1997; Grottanelli 1986; Jackson 2006; Skutsch 1987 等参照。

— I の参考文献

Alfonso, Fernando Wulff 2014: *The Mahābhārata and Greek Mythology*, Motilal Banarsidass.

Buitenen, J. A. B. van (trans.) 1973: *The Mahābhārata 1. The Book of the Beginning*, University of Chicago Press.

Buitenen, J. A. B. van (trans.) 1975: *The Mahābhārata 2. The Book of the Assembly Hall, 3. The Book of the Forest*, University of Chicago Press.

Clader, Linda Lee 1976: *Helen: The Evolution from Divine to Heroic in Greek Epic Tradition*, E. J. Brill.

Doniger, Wendy 1997: "Sita and Helen, Ahalya and Alcmena: A Comparative Study", *History of Religions* 37, 21-49.

Dumézil, Georges 1968: *Mythe et épopée I*, Gallimard.

Evelyn-White, Hugh H. (trans.) 1914: *Hesiod, the Homeric Hymns and Homeric*, Loeb Classical Library.

- Ganguli, Kisari Mohan (trans.) 1970: *The Mahabharata*, vol.1 Adi Parva, Munshiram Manoharlal.
- Gresseth, Gerald K. 1979: “The Odyssey and the Nalopākhyānam”, *Transactions of the American Philological Association* 109, 63-85.
- Grottanelli, Cristiano 1986: “Yoked Horses, Twins, and the Powerful Lady: India, Greece, Ireland and Elsewhere”, *Journal of Indo-European Studies* 14, 125-152.
- Jackson, Peter 2006: *The Transformations of Helen: Indo-European Myth and the Roots of the Trojan Cycle*, J. H. Röll.
- Jamison, Stephanie W. and Joel P. Brereton trans. 2014: *The Rigveda, vol.III*, Oxford University Press.
- Jong, J. W. de 1985: “The Over-Burdened Earth in India and Greece”, *Journal of American Oriental Society* 105, 397-400.
- Kilmer, Anne Draffkorn 1972: “The Mesopotamian Concept of Overpopulation and its Solution as Reflected in the Mythology”, *Orientalia* 41, 160-177.
- O’Flaherty, Wendy Doniger 1980: *Women, Androgynes, and Other Mythical Beasts*, University of Chicago Press.
- Skutsch, Otto 1987: “Helen, Her Name and Nature”, *Journal of Hellenic Studies* 107, 188-192.
- Matsumura Kazuo 2014. “Aspects of Heroic Mythology”, in Antoni, Klaus and David Weiss eds. *Sources of Mythology: Ancient and Contemporary Myths*, LIT, 143-151.
- Mayer, Kenneth 1996: “Helen and the Dios Boule”, *American Journal of Philology* 117, 1-15.
- Schwarzbaum, Haim 1957: “The Overcrowded Earth”, *Numen* 4, 59-74.
- West, M. L. 1997: *The East Face of Helicon: West Asiatic Elements in Greek Poetry and Myth*, Clarendon Press.
- エウリピデス 1986: 「ヘレン」(中村善也訳)、『ギリシア悲劇Ⅳ エウリピデス(下)』筑摩書房、所収
- 沖田瑞穂 2008: 『マハーバーラタの神話学』弘文堂
- 鏡淳訳 1989: 『ナラ王物語』、岩波文庫

— II の注

- (1) 新約聖書のマタイ福音書 24 : 3-31、マルコ福音書 13 : 3-26、ルカ福音書 21 : 7-28 はほぼ共通の内容で、終末の徴、大きな苦難の予告、人の子が来るという三つの内容を含む。その中からマルコ福音書によって特徴的な部分を以下に抜き出してみる(新共同訳による)「13.8 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起きる。(中略) 17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。(中略) 24 それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、25 星は空から落ち、天体は揺り動かされる。26 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」
- (2) 沖田 2008 は『マハーバーラタ』の乳海攪拌神話の冒頭部分(3, 186, 24-55)にも上記インド=ヨーロッパ語族の滅亡と復活の神話の痕跡が認められるとするが、必ずしも全面的な世界の衰退とも決め難いと感じているので、本稿には含めなかった。

— II の参考文献

- Ström, Åke V. 1967: “Indogermanisches in der *Völuspá*”, *Numen* 14, 167-208.
- オウィディウス(中村善也訳) 1981: 『変身物語(上)』岩波文庫
- 沖田瑞穂 2008: 「乳海攪拌神話とラクナロク」『明星大学研究紀要』16、99-108
- 野田恵剛訳 2009: 『ブンダヒシュン(1)』、『貿易風—中部大学国際関係学部論集』4、149-186
- 野田恵剛訳 2010: 『ブンダヒシュン(2)』、『貿易風—中部大学国際関係学部論集』5、120-171
- 野田恵剛訳 2011: 『ブンダヒシュン(3)』、『貿易風—中部大学国際関係学部論集』6、165-232
- ヘシオドス(松平千秋訳) 1986: 『仕事と日』岩波文庫
- 『マハーバーラタ4』(上村勝彦訳) 2002: ちくま学芸文庫
- 「巫女の予言」(谷口幸男訳) 1973: 『エッター—古代北欧歌謡集』所収、新潮社

ヴェルナン、ジャン＝ピエール 2012：「種族についてのヘシオドスの神話—構造分析のための試論」、『ギリシア人の神話と思想—歴史心理学研究』（上村くにこ他訳）、国文社、所収（原著 1965）

記：本研究は JSPS 科研費 16K02185 の助成を受けたものです。